

地区名：阪谷地区

実施主体：食育のふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

- 地区人口 1,343人（H31.4.1現在）
- 世帯数 446世帯
- 行政区数 18行政区
- 面積 約31.2平方キロメートル
- 地区の沿革

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、西は九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。

集落は18。昭和29年の町村合併により、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500の中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区で、面積の3分の2は山林であり、農地は圃場整備が進み広大な棚田となっている。

六呂師高原には、広さ220ヘクタールの奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設やミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

2 現状と課題

■人口減少している実態

阪谷地区の人口は、ここ数年の状況をみると年間約40人ずつ減少している。地区の高齢化率は大野市平均を上回っており、自然減少はこしばらく高い割合で続いていくと思われる。また、地区外への転出もあり、人口減少は続いていくと思われる。

■人口減少に対する対策

人口減少による地域力（ヒト・モノ・カネ）の低下を補う手段として、地区内へ人呼び込み、交流人口を増やすことが、地域力回復のキーワードになってくると思われる。

■阪谷のブランド化とインナーブランディング

交流人口を増やす事だけに目を向けるのではなく、阪谷地区が持つヒト、モノに磨きをかけ、ブランド化を目指すことが重要だと考える。その上で、インナーブランディングの観点で、地区民が、住んで良かったと思えるような活動を行っていく

必要がある。

■阪谷の次世代を担う人材の育成

人口減少、高齢化に伴い、地域活動の担い手も高齢化、担い手不足の状況がある。今後も活発な地域活動を継続していくために、次の担い手を育成していく必要がある。

3 事業の内容

【交流人口の拡大による地域活性化を図る。】【「さかだに文化の里づくり」で地域活性化を図る。】

【阪谷青年団の活動を支援する。】

を基本目標とし、①さかだに雪まつりの開催（中止）、②陶芸教室の開催、③青年団活動の応援、④地区文化祭の開催に取り組んだ。

①第6回さかだに雪まつりの開催（中止）

阪谷地区におけるさらなる交流人口の増加を狙い、昨年度に引き続き、六呂師高原スキーパークでの実施を予定していたが、例年にない記録的な雪不足によりやむなく中止となった。

今回、残念ながら雪まつりは中止となったが、実施に向け会議を進める中、他のイベントの星降るランタンナイトを連携イベントと位置づけ取り組めたことが大きな成果であった。

②陶芸の魅力づくり 陶芸教室

自主グループ「越前おおの阪谷桃木窯」を中心に、毎月第1・3木曜日に中村鐵遷氏（勝山市在住）を講師に招き陶芸教室を開催した。

陶芸教室では、毎回10名ほどが参加し、電動ろくろによる作陶技術や釉薬のかけ方を習い、受講者の技術がさらに向上した。

また、阪谷小学校や尚徳中学校などと連携を図り、児童や生徒向けに陶芸体験教室を実施し、陶芸の形づくりや絵つけ、釉薬つけなどを行った。

陶芸を通じて、阪谷の新しい文化に触れ、個性ある作品を作陶するだけでなく、豊かな感受性や創造性を培うことができた。



③青年団活動の応援

阪谷地区に青年団が結成されており、阪谷地区で若者が集う場づくりや地域活動への積極的な参加の後押しを行った。

具体的には、さかだに雪まつりイベントは中止となったが、企画段階から実行委員会委員として参画してもらうことができた。また、雪まつりの連携イベントの星降るランタンナイトではイベントスタッフとして参加し、活動を行った。

阪谷地区の風景を集めたカレンダーを製作するため、構想、写真の選定、レイアウトの考察など発行に向け準備を進めてきたが、雪まつりに併せて調整してきたため、やむなく見送ることとなった。

次世代を担う若者が、阪谷地区に関連するイベントや事業について積極的に関わったことは、大きな成果であった。

④地区文化祭の開催

阪谷地区における文化活動の拡大を図ろうと毎年開催している。しかし、近年参加者が減少し、せっかくの文化に触れる機会が十分に生かされていない。

そこで、今年は早い時期から関係者で協議を重ね、文化祭会場へ足を運びたいような企画を複数立てた。折しも8月に開催された「阪谷夏まつり」において10年前のタイムカプセルが開封されたこともあり、令和元年に再度未来に向けてタイムカプセルを送ることにした。テーマは「5年後のあなたへ」とした。

タイムカプセルへの投入のために文化祭会場へ

足を運び、そこで地区住民の作品展示や貴重な収集品（マイコレクション）を鑑賞、さらに自ら作成できる「さかざきんちゃんTシャツプリント体験講座」や、阪谷地区の古い写真を使った文化講座を設け、一日中文化活動を楽しめるイベントとして肉付けした。

結果、今まで文化祭への関心が薄く、来場しなかった方々からも好評を得ることができ、「地区住民が参加したくなる文化祭」として充実させることができた。



〈貴重な収集品（マイコレクション）〉



〈Tシャツプリント体験講座〉

4 事業成果

①第6回さかだに雪まつりの開催（中止）

さらなる交流人口の増加を狙い、昨年度に引き続き、六呂師高原スキーパークでの実施を予定していたが、例年になく記録的な雪不足によりやむなく中止となった。

しかしながら、イベント終了後の実行委員会では、新たなアクティビティ案や雪不足時のイベント部分開催など、実施に向けての前向きな意見があった。

次回の雪まつりは、2月中旬頃に六呂師高原スキーパークで他のイベントと連携した実施で調整することを確認、さらなる交流人口の増加を図ることとした。

②陶芸の魅力づくり 陶芸教室

陶芸の魅力づくりでは、陶芸グループ「越前おの阪谷桃木窯」と連携し、陶芸教室をきっかけに、陶芸という阪谷地区の新しい文化に触れ、親しむ機会の充実を図った。

陶芸教室では、毎回10名ほどが参加し、電動ろくろによる作陶技術や釉薬のかけ方を習い、受講者の技術向上が図れた。

阪谷小学校では、総合活動授業の中で陶芸講師、受講生が講師となって、陶芸体験を通じて交流を図り、個性ある作品を作陶するだけでなく、豊かな感受性や創造性を培うことができた。また、子どもたちが栽培、打ったそばを、自分が作った器で食するなど、地産地消や食育にもつながった。

③青年団活動の応援

阪谷地区で若者が集う場づくりの応援や、地域活動への参加の後押しを行った。

さかだに雪まつりでは、イベントは中止となったが企画段階から実行委員会委員として参画してもらうことができた。また、雪まつりの連携イベントの星降るランタンナイトではイベントスタッフとして参加、活動が行えた。

阪谷地区の魅力ある資源を活用したカレンダー製作では、構想、写真の選定、レイアウトの考察など発行に向け準備を進めてきたが、雪まつりの

中止により見送る結果となった。

次世代を担う若者が、地区に関連するイベントや事業に積極的に関わったことは、大きな成果であり、今後の青年団活動に期待したい。

④地区文化祭の開催

気軽に参加し体験や鑑賞する機会をつくるため、地区文化祭を開催した。

文化祭イベントでは、8月の「阪谷夏まつり」のタイムカプセル開封されたことを受け、「5年後のあなたへのメッセージ」をテーマに再度タイムカプセルを実施した。特に、地区住民の参加者にはお礼の品を贈るなど、事業促進を図った結果、応募数が71点と一定の効果もあり、地区文化祭の認知度アップにつながった。

また、地区住民の作品展示や貴重な収集品（マイコレクション）を鑑賞や、自ら作成する「Tシャツプリント体験講座」や、阪谷地区の古い写真を使った文化講座も実施し、文化祭に興味を持ってもらえたとともに、郷土愛や阪谷史を再認識できた。

5 今後の展望

「雪まつりの開催」については、天候に左右されるイベントであるため、雪不足時にはどういった形で対応し、実施していくかが課題である。

「陶芸の魅力づくり」については、陶芸づくりが学校の総合活動授業の一環として実施できている。今後は、観光客向けに観光体験プログラムの1つとして実施できるよう、さらに関係者と協議していきたい。

「青年団活動の応援」について、今後、支援が必要か、また地域活動とどのように連携していくかなど、青年団の意向も確認しながら、適切な応援を進めていきたい。

「地区文化祭の開催」については、各種イベントを通じて認知されてきているが、まだまだ関心が薄い。今後は、どのような方法で文化祭の魅力や質を高められるか、また、違った形で実施していくのかなど検討が必要である。